

“Every finisher is a winner”

「国や順位よりもライバルのリスペクトを」

特別寄稿 五輪ボランティアに参加して

廣實正人元パシフィックコンサルタンツグループ(株)常務取締役



筆者

東京オリンピック、パラリンピックが終わった。五輪の閉会式で、国際オリンピック委員会（IOC）のバッハ会長が「すべてのボランティアの皆様、誠にありがとうございました」と日本語で感謝したように、東京オリ・パラはボランティアの支えがあってこそ大会だった。選手たちの活躍ぶりが華々しく伝わるのは当然だが、弊誌としてはボランティアの思いも記録しておきたいと、69歳の市民ボランティアに特別寄稿をお願いした。

オリンピック東京大会に、トライアスロン競技の大会ボランティアとして参加した。

東京大会は、新型コロナウイルスの感染が拡大する中、1年延期されたものの、2021年になっても収束を見通せず、開催反対や延期を求める世論が半数を越える中での開催となった。森前組織委員会会長の不適切な発言もあり、8万人のうち1万人のボランティアが辞退したという。

トライアスロンは、スイム（水泳）・バイク（自転車）・ラン（長距離走）の3種目を連続して行う競技。1974年に初めてアメリカで競技大会が開催された比較的新しいスポーツである。

オリンピックでは、2000年のシドニー大会から正式競技として採用され、スイム1.5km、バイク40km、ラン10kmの合計51.5kmの距離が競われる。今回、男女4名のチームで競うミックスリレーが新設された。コースは港区のお台場海浜公園を中心に、スイム2周回、バイク8周回、ラン4周回のコースが設定された。バイクとランは公道を走る。

トライアスリートからボランティアに

筆者は1952年大阪生まれ。大学進学で上京し、卒業後、建設コンサルタント会社に就職、以来、川崎市に居住、2020年から年金生活。50代後半になってランニングを始め何回かフルマラソンに出るようになった。記録が頭打ちになったころ、トライアスロンがカッコよく映り「モテたい一心」で、2013年泳げないにもかかわらず、トライア

スロンクラブの門を叩いた。「泳げなくてもウェットスーツを着るので沈まない」という妙な理屈に納得した。国内大会に何回か出場するようになったが、毎回、完走するのが精一杯。いずれ限界があると思い、2018年にトライアスロン公認審判員資格を取得し、県内の大会に審判として参加するようになった。この経験が役に立ちボランティアに選ばれた。

午前2時に集合 「横断歩道」を担当

2021年になってもコロナ禍は収まらず、開幕直前の7月8日、無観客開催が決定された。ボランティアの活動は6日間で、7月23、24日が公式練習、26、27日がそれぞれ男女個人競技、30、31日がミックスリレーの公式練習と競技である。役割はコース上の横断歩道担当となった。個人競技のスタートは早朝6時30分、リレーは7時30分、ボランティアの集合は午前2時とされた。

会場へは公共交通機関利用とされたので、午



公式練習の様子